

## 安曇野・大北地域の高等学校を考える合同部会 第2回会議 会議録

日時：令和3年4月26日（月）

午前10時～午後0時10分

場所：大町市 サンアルプス大町

### ◎開 会

（司会）皆さま、お忙しいところをお集まりいただきましてありがとうございます。

ただ今から、「安曇野・大北地域の高等学校を考える合同部会」を開会いたします。私は本日の進行を務めます、大町市教育次長の竹内と申します。よろしく願いいたします。本日の会議は、長野県教育委員会が進める高校改革に係り、3月11日に開催しました「大北地域における高等学校を考える協議会」の初回会議におけるおいて、本日の開催が確認されたものでございます。

本日は、前回会議の決定を受けまして県内の「総合技術高校」の先例校であります「須坂創成高校」の西澤校長先生と「佐久平総合技術高校」の田中校長先生にご足労いただき、総合技術高校の学びと統合後の学校の様子をお話しいただくことになっております。飯田OIDE長姫高校は、別会議と重なりましたので、どうしても出席できない、とのことで、県教委による資料説明をいたします。

また、前回の会議の「議事録」につきましては、事前に送付しております。会議事項の冒頭にご確認願います。

最初に、お手元の資料の確認をお願いいたします。次第の下方に記載してございますので、ご確認ください。

（確認）

最初に、長野県教育委員会より、駒瀬室長からご挨拶がございます。お願いいたします。

（駒瀬室長）皆様方、おはようございます。高校再編推進室の駒瀬でございます。本日は公私ともに大変お忙しい中、ご参集いただきまして、誠にありがとうございます。また、新型コロナウイルス感染防止対策を万全に行つての開催でございます。少し寒いかもしれませんが、よろしく願いいたします。

最初に、全県の状況について簡単にご説明をさせていただければと思っております。昨年5月に確定いたしました再編整備計画1にある小諸新校、佐久新校、伊那新校については、統合新校ごとに再編整備計画懇話会を設置し、地域の皆さんとともに、目指す学校の検討が始まっているところでございます。

また、3月25日に策定公表いたしました再編整備計画二次案では、旧第2通学区須坂・中野地域、第5上田、第8上伊那、第9の木曾の再編整備計画【二次】（案）をお示し、この中で4つの再編統合案をお示ししてございます。今後は5月か6月にかけて、当該地域での住民説明会などを実施して、二次を確定して参りたいと思っております。

旧第11、第12通学区につきましては、11通学区の懇話会と、12通学区の協議会のそれぞれの議論の積み重ねの上に、設置されているこの合同部会での議論が今後の本地域の意見・提案で

大変重要なものになると考えております。前回ご説明したとおり、県といたしましては、このままの状況が続きますと、3校の専門校の小規模化が進むため、活力ある専門教育の学びの場の配置が必要であると考えております。

本日は、先ほど司会の方から話がありましたように、総合技術高校への理解を深めてもらうために、須坂創成と佐久平総合技術高校の校長先生には、その説明をしていただき、また、飯田OIED長姫高校につきましてはビデオでの説明ということで、各校の教育実践、取り組みの発表をしていただきながら、総合技術高校への理解を深めていただければと思っております。今日も様々な忌憚のない意見をお聞かせいただけたらと思っております。

本日はよろしく願いいたします。

(司会) 続きまして、年度が替わりまして、お二人の構成員の入れ替えがございましたので、私から御紹介申し上げます。小谷村教育長、関 芳明 様 でございます。

(関) よろしく願いいたします。

(司会) 北安曇郡・大町市小中学校長会長 大町第一中学校長 木下 正道 様でございます。

(木下) 木下です。よろしく願いいたします。

(司会) なお、本日ご欠席の方が1名ございます。松本機械金属工業会長の平林正吉様でございます。どうぞよろしくお願ひします。

それでは、会議事項に入ります。荒井座長様、荒井副座長様、お席を移動していただき、会の進行をお願いします。

(座長) それでは、司会進行を務めさせていただきます信州大学の荒井でございます。よろしくお願ひします。資料の方はよろしいでしょうか。それでは、第2回合同部会ということで、後程説明がありますけれども、今回は具体的に成功して動いています総合技術高校の西澤先生と田中先生のお話を十分お聞きし、理解を深めていただいたうえで「活力ある専門高校・専門教育」「総合技術高校の学びの必要性」について、議論を深めたいと思っておりますので、ご協力願ひします。前回は様々な観点で具体的な議論を展開していただきました。また、子どもたちの学びの姿などを含めて直接お話を聞くということになっております。次第に目を落としていただきたいと思いますけれども、後半では、意見交換ということで、二つの論点として、一つ目は、専門高校の学びのあり方として、どのように活力を高めていくことができるのか、二つ目は、この地域における総合技術高校の学びの必要性はどの程度であるのかという事であります。後半では、全員の皆様からご発言を頂戴できればと思っております。それでは、会議事項に移りたいと思ひます。会議事項(1)の資料説明をお願いいたします。

( 説 明 : 長野県教育委員会 山岸主任指導主事 )

(座長) ありがとうございます。事前に資料を皆さんお読みいただいているかと思いますが、改めて総合技術高校の特長としましては、旧来型のスペシャリストの育成ということで、フレキシブルに時代の変化に対応していくということを踏まえた専門性を育成していくということが掲げられております。また、具体的にご説明いただきますけれども、学科横断選択科目というものの特徴や、既存の学科の枠を超えた学びというものを実現できるのではないかと期待されているということをご確認いただければと思います。また、この資料の再編・整備の進め方に関しましては、個別の計画を策定するにあたって、様々な検討事項がどのように検討されていくのかということをご確認いただければと思います。ご質問もあるかと思いますが、この後で一括してお聞きしたいと思いますので、よろしく願いいたします。それでは、次第の(2)に移りたいと思います。最初に須坂創成高等学校長の西澤国之(にしざわくにゆき)先生、お願いいたします。

( 説 明 : 須坂創成高等学校長 西澤国之先生 )

(田中校長) 皆さんこんにちは、須坂創成高校の西澤です。何かお役にたてればと思いますが、分からないところは聞いていただき、また、今日は学校要覧とパンフレットを用意しておりますので、状況を掴んでいただければと思います。ただ今映っているスライドは須坂創成高校の4階建ての管理棟の右側になり、このような形で新設してスタートをしております。続いて、須坂創成高校は、須坂駅から徒歩5分の位置にあります。立地も良くて、旧須坂商業高校のキャンパスと須坂園芸高校のキャンパスを統合して現在7クラスとなっています。この敷地は須坂園芸高校の敷地です。ここに工業科と工業等を新設してさらに管理商業棟を創ったということで、このキャンパスで学びが進んでいます。そして、総合技術高校の特徴ですが、端的に申し上げて4つあります。一つは、専門教育のいっそうの充実。二つ目は、他学科の知識を学習しより広い専門性を獲得することです。三つ目は、農工商の活動を結び付け、柔軟な実践力を身につけます。四つ目は、地域、産業界、大学、研究機関と連携し、人材養成を図ることです。そして、概要ですけれども、ここに、まず、農業、工業、商業の3学科を備えた総合技術高校になります。須坂から政界へ羽ばたく創成力という言葉は、すべての生徒が目指すべき姿、スローガンとしています。現在の農業・工業・商業それぞれ3クラス、1クラス、3クラスありますので、1学年に380名、現在全校で821名います。農業には、3つの学科7コース、工業には2年生から3コース、商業科も同じく2年生から3コース選べます。農業も同様です。3学科、それぞれの生徒が専門科目学んで、自らの専門性を強化するために、学科連携科目を受けています。これは生徒の実習風景です。シャインマスカットを収穫、或いは説明をしている姿があります。造園の施工実習、それから善光寺花街道での花のデザインを植え込みしています。下の左側には、マーケティング実践で、生徒が株式会社形式で冬に行っている演習の写真が沢山あります。下の右側には、旋盤を使った工業化の実習風景になります。お昼は、生徒は、中庭で、談笑しながら、コロナで密ですので、広がって食べるということがあります。こ

これは実は、企業さんから寄贈いただいて、時間で自動で水が出るようになりました。下は、須坂市メセナホールで課題研究発表会です。ホワイトとかロビーで、企画商品のスイーツとか、それから課題作品を展示しています。このスライドは、創造工学科について話しています。工業会1クラス、農業との工業が合わさった、農業と商業と合わさった中で、工業を新たに作って、創造工学科としたわけです。その目標ですが、長野県の工業科の新設は、昭和36年以降、54年振りになります。地域の産業精密機械メカトロニクスに対応した学習を行っています。精密機械コースは、須高地域と言いまして、周りの地域の主力産業の精密の学習になります。メカトロニクスコースは、工場での生業技術分野の学習になります。この二つが特徴的なコースとなっています。そして、創造工学科の立ち上げにあたっては、様々な各種機械を導入しています。例えば、メカトロニクス実習装置、3DプリンターそれぞれCNC三次元測定機、なお、最新の設備が整っています。デュアルシステムを導入して、この工業科がスタートいたしました。ドイツを発祥とする、デュアルは二つという意味でなんですけれども、教育と職業訓練を二つ同時に進めるシステムになっています。このシステムの特徴は、企業で実践的な職業教育を受けることになるために、協力企業の協力が不可欠になります。創造、現在一年生で産業基礎、2年生で就業体験5日ほど、3年生で、週1回10日ほど学び、3年生は2単位としています。このシステムについては、デュアルシステムの組織図を今出します。デュアル協力企業は、この4月で55社加盟しています。協力企業は、長野地域も含めて増加傾向にあります。須坂市の産業立地開発課のコーディネーターを当初よりしていただき、産・官・学が連携して発展しています。次に教育課程を見たいと思います。少し見づらいかもしれませんが、1年生の今の教育課程表ですが、1年生は産業基礎という科目が週2時間あって、専門科と普通科がペアで組んで、二人で授業を、同じ状況で行っています。2年生は、学科連携科目、これも週2時間ですけれども、マーケティング簿記、植物工場など9科目あります。他学科の学びができます。3年生は、課題研究が一番探究的な学びの最後のところですが、この課題はまだまだ研究不足のところがあります。そして、進路別選択については、機械工作、農業科学試験、簿記について、希望者は2年次に続き他学科の科目の選択が可能です。この情報も重要ですが、来年度から、新学習指導要領に変わります。それに伴って本校で方針を定めています。真ん中の辺赤字のところなんですけれども、課題研究が、当初の、平成27年のスタートで、同じ時間に全てそのままだったため、今回はすべて3学科3年生の時間を統一して、そのテーマによっては他学科の職員が全て入って、テーマを選べるようになります。それから、企業や須坂市と連携を進めます。もう一つは、他の総合技術高校3校と時間割を揃えて、いわゆる端末のリモート操作で他の学校からの学びが取れるようにしたいということで、今そういうことの中で進めています。

このように、テーマにより他校の学びを取り入れることが可能になった事が、非常に大きな特徴になっていると思います。そこでは具体的に来年度の紹介をいたします。産業基礎は、専門科の授業の方に1単位を切り替え、1単位にしました。1年生です。そして、例えば農業科では普通教科の管理基礎を導入します。

それから、商業では簿記を、これまではもう少し学び切れなかったという反省から1単位増えました。工業科は、デュアルの事前学習を深めたいということで、そのところを増やしました。つまり、実質的なところをとりながら新学習指導要領の対応に変えています。2年生からの学科連携科目を全て再編しました。農業生産技術、工業生産技術、企業研修など、植物、或いは機械、それから、流通すべてを包括した連携科目を導入します。3年生です。3年生は、先ほど申し上げた課題研究については統一の時間帯にしました。そして、進路別選択については、幅を広げて、後程進学のところでお話しますが、非常に多様な成果が見られますので、それに対応する、例えば芸術やスポーツ分野を越えた幅広い分野を想定して、選択できるカリキュラムを増やしました。

それでは、これから4期生の状況を申し上げます。少し円グラフが見つらいかもしれませんが、上の左が2017年でございます。上の右が、4年前、3年前、下が、左前、下の右が今年となります。特徴的なところだけ申し上げます。まず2017年、4年前の進路状況では、就職者が100名、専門学校81名でした。この2019と2020の2年度を見ますと、就職者は100名から7、80名と減少し、進学者は専門学校が減って、4年制大学と短大への進学が増加しました。進学者には、農業大学校や長野県工科大学校など、専門分野を生かす進学者の一定数は、10名以上が大学校等への進学になってきています。この特徴をもう少し申し上げます。4期生、国公立大学は、信州大学、北見工業大学、公立東京諏訪理科大学に3名が合格いたしました。東京農大、日東駒専、名城、神奈川、国立音大など有名大学に多数合格しております。長野保健医療大学、清泉女学院大学、新潟福祉医療大学などの看護系医療系へも多数合格しております。前年度の3期生の様子です。国公立大学は、新潟大学、高崎経済大学、都留文科大学に3名合格し、東京農大、日東駒専、名城、神奈川など有名大学に述べ102名が合格しております。長野医療などその他医療系にも多数合格者が出るという状況で、非常に進学実績が上がりました。そして、次のスライドですが、見つらいと思いますので、要点だけ申し上げます。ここに書いたスライドは、卒業生の中で、学科連携科目を生かした進路選択に繋がった具体的な事例がどんどん出てきました。例えば、農業科から文教大学経営学部へ進学した生徒は、連携科目で日商簿記3級を取得して、経理学を大学で学びたいと考え、進学をしています。それから、農業科から都留文科大学へ進学した生徒も日商簿記を取得して、地域の活性化に尽力したいということから、農業と経理学の観点からレポートを作り、プレゼンで、進学をしました。その他横浜商科大学へ進学した農業科の生徒ですが、工業科でも英語が好きだということで、英語を学び、そして、そのためにですね、全く分野が違う関東学院大学の経営学部に進学したり、連携科目以外でも、普通科の学びも当然対応することになります。また、商業科の生徒が卒業したら、工業科技能試験の科目を取っています。他にもたくさん事例がありますので、工業科の機能試験の資格を取るということも重要だったのかなと思いますし、農業科の危険物取扱者、商業科の日商簿記の資格、他学科の学びはより良い進路選択に繋がっています。卒業生の進路実績によって地元からの評価は現在高いです。中学、保護者から中学校の生徒保護者から一定の理解が得られています。令和3年度の、今年度で見ますと281名で定員を満たしています。農業科では、県内

企業を中心に専門性を生かした就職を、食品製造業の造園業など半数以上が達成しています。

工業科の4期生の就職状況を見たいと思います。協力企業会、先ほど申し上げた企業会が技術者として、専門性を生かした就職をほぼ100%達成しました。商業科は経済事業を中心に、事務販売など半数以上が希望を達成しています。専門職の方は、警察官など公務員希望者も合格しています。ここで最後に申し上げたいのは、就職のところでは、デュアル企業に創造工学科で10数名、それから農業科と商業科に30名が毎年就職をしています。このように、関係企業の影響力を非常に手厚いということがうかがえます。行事の一つで、創成フェアというものがあります。これはどら焼きで、名前はどらリンと言って、どら焼きに創成のリンゴをミックスして、生徒が創った焼印をして販売しているという企画の商品です。一番下の右側には、全校で挨拶をしていますよね、令和元年度に、三日前にあいさつ練習全校でやります。商業科では徹底的なマナー練習をします。そういったことが、全校の取組みとなっております。2年前の創成文化祭では1日で2500人を超えて来場いただいて、中庭企画で例えば、書道では「魂」というパフォーマンスを披露し、沢山のクラブが活躍しているという状況がございます。そして次です。課題研究発表会は連携科目などの発表を須崎市メセナホールで展開をしています。それから、卓球部の全国大会や専門部の簿記、農業関係など、ここに垂れ幕がありますけれども、沢山の子どもたちが全国へ出場しています。そして、壮行会の状況を見ていただきたいんですが、2学年の生徒の700名の生徒が200名を応援するというのを毎年やっています。今年はリモートで行いました。また、学科連携科目の生徒で、LEDライトをブドウに夜照射して、ブドウの糖度が上昇するという研究成果を地元の企業と連携をして、植物工場の事業を展開した事例で、屋内型から屋外に出るところまで進んできています。NHKでの放送がありました。それから、様々な制度を検証ツールとしてとらえた質問とかありますが、これは子どもたちだけじゃなくて、遠くに離れているおじいちゃんおばあちゃんや家族から見ても集約して、そして地域ということです。

その成果の一つとして、平成元年度に、全国デザインコンクールで、これは環境造園科ですけども、文部科学大臣賞をいただきました。そのほか、2先生の就業体験の結団式であるとか、様々なところで、私も校長講和をさせていただいていますが、自らの体験、それがしっかり終わるそういう中でも、果敢に挑戦して欲しいというふうに力を伸ばしています。そして、デュアル企業の報告会は頻繁に行っています。写真はオリオン機械株式会社の菅沼選手（技能五輪金）からお話をいただいているところです。生徒も真剣に取り組んでいて、について質問、質疑、応答の形式があります。

最後に、一つまとめたものですが、校長として感じる総合技術高校の必要性による課題ですけども、本校は、他学科の学びができて、大規模化して、部活動が活発になりました。そして進学の実績も上げられました。令和元年度はコロナ禍で、部活動も時間制限がありましたが、地元の須坂農業小学校で生徒が野菜の先生としての活動ができました。運動部で、男子バレー部が北信地区で準優勝するなど、成果もコロナ禍でもありました。生徒はもともと探求心に溢れた存在です。視野を広げるような情報提供が必要だと思います。特に今年度の方へは、生徒

の探究心を掻き立てるため、体験を大切にすることで、様々な方々と関係が広がり、視野が開けます。須坂創成高校に工業科を新設したことは、地元でもあることができるということ、それから、優良企業が多くある地域の工業界の活性化に繋がる事例になっています。専門高校からの進学者は、地元へ戻る割合も高いです。これがちょっと成功事例だと私は思います。農業科・商業科も春・夏に生徒が企業の協力を得てインターンシップに多くの生徒が出かけます。この3月にも60名ほど参加いたしました。商売や、現場作業に触れる機会も、高校生限定で体験できることは、職業人の育成に必要だと思います。これからも地域にどうあるかを目指して地元須坂市とのPR活動を通して、自分自身、それから地域社会の未来をつくる力を身につけるために、須坂市第6次総合計画とタイアップしております。今後、私は生徒に聞きたいと思います。総合技術高校に通ってどう思いましたか。ちょうど長野県教育委員会の学びの指標の試行が今年度始まっています。絶対評価をしても、どういったことがすごく困ってるのかと思います。様々な困難を超えていく生徒もいます。生徒の思いを伝える場をつくり、生徒のそれぞれの評価をもとに、生徒を支援していきたいと思います。これは昨年、コロナ禍で6月に学校が再開しました。作物は時を刻みました。生徒は直ぐに枝豆の定植を行って、朝水やりをしている姿です。7月には紫の花が咲いて、8月には枝豆の収穫を終えました。とてもおいしかったです。このように、作物はコロナ禍でも暦どおりの成功を続けています。安曇野の南農校長から転任して3年目となりました。南農の農場には、先人が努力して作り上げてきた立派な作物を作る土壌層があり、今も作物が健全に育っていることと思います。以上でございます。ありがとうございました。

(座長) 西澤先生、ありがとうございました。後ほど、しっかり質問の時間をとりますが、スクリーンは次のスライドに変えますので、スライドの中の質問を先にお聞きします。いかがでしょうか。

(質疑なし)

続いて、佐久平総合技術高校長の田中信明(たなかのぶあき)先生、お願いいたします。

( 説 明 : 佐久平総合技術高校長 田中信明先生 )

(田中校長) 皆さんこんにちは。佐久平総合技術高校長の田中信明と申します。よろしくお願ひします。本校4年目になります。私も以前、南安曇農業校の教頭をしておりました。

本校の沿革でございますが、皆さんご承知かとは思いますが、第2次再編計画が平成20年に策定されて開校まで丸7年、かなり時間を経て開校しております。このように3校から一つの学校になったわけですが、北佐久農業高校、岩村田高校の工業科、臼田高校の総合学科3つが一緒になってできました。もともとは地域に非常に密着した土地柄であると感じておりました、佐久市が出来る前の市町村の名前がそのまま残っていると強く感じました。そ

こへ佐久平という新しい響きになったと感じております。そして、二つのキャンパスで行っていますが、いい面もあればなかなか苦しい場面もあるのかなと感じております。

それでは本校の教育課程を紹介させていただきます。まず現状でございます。農業科と工業科が連携して、産業基礎の1・2というものがございます。それから、独立科目として、植物工場があります。この詳細は、お配りした学校要覧をご覧くださいと思いますけれども、1年生で2単位、それから2年生で2単位、産業基礎1・2というのを持っています。それから3年生で、主に農業科の生徒が特別講座をやっております、工業科でも一緒にやっていたんですけど、希望する生徒がいないということで開講していません。産業基礎の1の方です。具体的言いますと、4月から9月までテーマ別の農業科に6コース、工業科に4コースありますけれども、それぞれの特色を生かした授業を各コースの授業を一通り体験するということがあります。そして後半については、将来役に立つ資格をやろうということで、QC検定を全員で取るということをやっております。あと折々に、臼田キャンパスでは、森林学習、地域の環境学習コースをおこなっております。総合学習的な面も併せ持っています。これが産業基礎1の関係です。続いて2年生の産業基礎2です。こちらは少しコンセプトが違いまして、1年生の時は全コースを全員が体験するというのをやりますが、2年生になりましたら、このようにテーマを設定しまして、このうち一つを選択します。その選択肢した一つのものについて、半年間学んでいくという形になります。ですので、基本的に自分のコースでやっているものは選択しないということになっていますので、他のコースの興味を持ったものについて、少し深くを掘り下げていくというものが産業基礎2となります。例えば、産業機械を操作するというので、バックホーであるとか、そういう機械の操作について学ぶなど、それぞれのコースの先生が専門に教えてくれるのを主に植物生産コースの生徒達が学ぶ。それから2学期になりますと、工業科は岩村田高校の方の当時の企業さんにインターンシップに出かけておまして、そのための学習をしてインターンシップに行き発表会をするという取組をしております。農業科はインターンシップを3年生で行いますけれども、農業検定の資格の授業をしております。こういう発表会がありますが、こういう形でやって、3学期にまとめをする、そして次の年への準備をすることとあります。先程申し上げましたけど、農業科の植物生産コースでは、新たにできた植物工場棟で、学びをしております。ここで電気情報科の課題研究で、この植物工場の中の環境などのコンピューターで制御する、そういう取り組みをしていますが、なかなか共同研究には至らないという状況です。そして、今ご説明申し上げた、2年間にわたって産業基礎1・2という形でやっても、ある程度形ができてよかったんですけど、やはり問題もございます。まずは、一つ問題があるのは、農業科は週30時間でやっているんですけど、工業科は週31時間でやっております、飛び出しの授業であります。それが木曜日の7時間目となります。なので、放課後の活動がうまく合わない、何とか解消したいというのが一つです。それから、年間通してやっているんですけど、両方の科で一緒になってうまくいかないことがあり、何とか同じ活動にしていきたいというところがありあす。それが課題研究に結びついていくのかということが中々結びついていかない、これを何とかしたいということで、新しい教



育課程で考えたことはこちらとなります。お手元の「令和5年度開講予定「産業基礎」について」という資料を用意しましたので、ご覧ください。この時間を是非探究学習にして欲しいと思い、2年間でやっていく学びのツールを、1年生の時に自分のコース勉強をまだしていなうちに他のコース勉強をするというのは、なかなかわからない、ということで、この形に変えることにしました。具体的に言うと、1年生の2時間を無くして、2年生の2時間に集約します。この中で年間を通して4つの期間だけで動くということで、裏面をご覧ください。まずは先ほど申し上げたような、地域の産業についてしっかり調べよう、そして、その報告会をしよう、それが2期目。そして、3期目にそれをもとにしてインターンシップに出かけて行って報告会をしよう、そして4期目にその地域の課題をもとに来年度の課題研究につながるような探究学習をしよう、という4つの探究のサイクルを回していくのはどうかということで、原案を作っています。これまだ確定ではありませんので、今こういうふうに進んでいるということで、参考にしてもらいたいと思います。こちらの資料ですけれども、このようなことでぜひ進めていこうということで考えています、これを教育の目玉として、ここでの探究学習を、3年生での課題学習につなげていく、そして本校のグランドデザインですが、カラーで一枚刷ってあるものをご覧ください。佐久平の明日を創る人物たれ、というとても素晴らしいコンセプトですが、それを実現するためにどのような教育活動をすすめていくかということを図示していただいたのが、「佐久平に根を張り、未来の佐久を「創」る人をつくる」、地域に密着した教育をということで、そのためにはどうしていくか探究の時間を核として課題研究につなげていけるような教育課程をつくって欲しいということで、作りあげたものです。こんな形で次の教育課程を考えています。

それでは、卒業生の進路状況です。大体全体として進学が60%、就職が40%ぐらいです。詳細はお配りした学校要覧で確認していただければと思います。25ページございます。こちらの農業科の進路状況が出ておりますけれども、左上の方に過去4年間の、このように北佐久農業時代にはなかったことですが、国公立大学に進むものも出てきた。また、長野県工科短期大学校に1名合格しております。この生徒は、総合工学部ということで電気自動車の勉強をするうちに、そちらの方に進みたいということで、工科短期大学校に行って更にその学習を継続していると来ています。このようなそれぞれの分野を生かした進路も出てきている状況です。

資格取得の取組み、活動等でございます。資格取得に関しては工業系の資格や農業系の資格をそれぞれに取得することができる部活動に関しては先ほど言いましたような電気自動車などの工業専門部があり、そこに農業系の生徒が入りまた、農業系の専門部に工業系の生徒が入るという、そういうこともできるようになっています。その集大成が文化祭に表れており、本校にも非常に沢山のかたが来られる状況にあります。なんとといっても魅力は、非常にいろんなものが、コンテンツが豊富である、そしてそれをどのように見せるかということ、非常に工夫しています。この後、文化祭の映像を短時間で見ていただきたいと思います。

(文化祭の映像)

もう少しありますが、時間もありますので、次にまいります。

本校は、浅間キャンパスと臼田キャンパスという二つのキャンパスがあるため、なかなか統一的な学校経営ができないという悩みがありますが、浅間キャンパスの中の農業科と工業科の隔たりというものがあったそうです。特に岩村田高校から北佐久農業高校の校地へ移ってきたということで、工業科の生徒達からすれば先生方の居心地の悪さ的なものが感じられたということです。それが、ここ7年間の間にかなり解消されて、融合されてきたんだなと感じています。その中で、6年前いらっしゃった先生が、別の学校へ行って再び、再任用という形で帰ってらっしゃった先生ですが、その方と話をしている、かなり農業と工業の先生達の融合が進んだね、という話をしました。生徒はこういう活動を通して、先生は達のお互いの交流がかなり進んできて、大分融合ができてきたなと感じています。専門校であるためスペシャリストを育てたいという面があると思いますが、横に広くさらに深くということができるところが総合技術高校の魅力ではないかと思います。スペシャリストでもあり、連携、多様性、これは先ほどビデオを見ていただいたように、色んなコンテンツがある学校であるということです。逆言うと、それが課題になっているということでもあり、魅力ではあるのだけれども、それをしっかり深められるかということも、それは、結局人の問題でもあります。先程、壁というお話をしましたが、職員の中にもまだ壁があり、農と工を一緒にやるということも、なかなか決まらなかったこともありますが、この7年間で大分進んできたのかなと思います。そして、それを何とか融合するキーワードは探究ではないかと。先程説明した探究を進める学級がキーになって農・工で合わせて一つのものを創るということになっていければいいのかなと今は考えています。以上です。どうもありがとうございました。

(座長) どうもありがとうございました。

それでは先程と同様に、スライドに関する質問はございますでしょうか。

(質疑なし)

よろしいでしょうか。

それでは、もう少しだけ進めさせていただいた後に、換気を行いたいと思います。

続いて、飯田OIDE長姫高等学校についてですが、資料提供のみということですが、資料の説明を県教委からお願いします。

( 説 明 : 主任指導主事 山岸 明 )

(座長) どうもありがとうございました。2・3分程度換気をさせていただいた後に、再開したいと思います。

3つの高校のお話を皆さん聞いていただいたところですが、二人の校長先生がいらっしやっていますので、せっかくですので細かな質問、踏み込んだ質問等受けたいと思いますがいかがでしょうか。

(内川) 先ほど質問してもよかったのですが、佐久平総合技術高校はキャンパスが2つに分かれていることに対するデメリットとして、職員や生徒の一体感というものを少し触れられているが、その他に具体的にキャンパスが2つに分かれていることに対しての難しい部分を教えていただきたい。さらに、なぜ2つに分かれたのかという経過を、説明しにくいとも思いますがお願いします。

(田中校長) メリットとしては、クラス数が7クラスになり人数が多いということで、クラブ活動が活性化したと聞いている。北佐久農業時代3クラス、臼田高校もかなりクラス数も小さくなり、クラブ活動等大きな活動が、チームスポーツがうまくいかなかったが、7クラスになり活性化したと聞いている。デメリットとしては、学校全体で一つの方向に向かってやるという、どうしても職員会が2つに分かれてやる、それを統一した方向にもっていくという点では困難が伴う。先ほどのクラブ活動に関しても、メリットもあるが、10km 離れている中で、平日の練習を一緒にやるのが難しい。PTAでバス等を出していただいているが、一緒にやるのが難しい面もある。

(内川) 授業はどうですか。

(田中) 普段の授業ではなかなか一緒にやることができない。先ほど説明を忘れたが教育課程が全く違う。先ほど説明したのは、浅間の農業と工業の連携科目。臼田の創造実践科、総合学科とは全くそういう面では一緒にやっている面はありません。課題研究等で一緒にできることをやろうということで、開校当初は、同じ時間で組んでいたのですがけれども、現在その距離があるなかで、いったりきたりが難しく、互いの施設はたまに利用することはあるが、教育課程的には一緒にやることはなかなかない状況にある。

(田中校長) なぜ2つになったかということは、私の方からはお答えできない。

(内川) そうすると先ほど冒頭で言われた専門性を深めることと連携が大事だということですが、連携の部分が離れているのでしにくいということですか。

(田中校長) そうですね。学校行事等で今までやっていたが、クラスマッチや強歩大会は、昨年一年間は、一緒にやるのが全くできない状況でした。今は本当に分かれて運営している状況にあります。

(内川) 学科の枠を超えた共通科目とか学科を横断的に繋げる授業とかができるかどうか。

(田中校長) 浅間と臼田に関しては、教育課程で共通科目がない。

(内川) それは離れているからではなく、もともとなくてもかまわないのか。

(田中校長) そう言う風に最初から設計されていたと思います。先ほどの資料の総合技術高校のまとめのところにあるが、総合技術高校として位置づけているのは、浅間キャンパスの方で、臼田キャンパスの方は総合学科、また違う教育課程なので、教育課程的に連携できるところは、例えば課題研究があったのですが、なかなかそこまでいかないということでもあります。

(座長) よろしいでしょうか。ちなみに、昨今のGIGAスクール構想の影響で、オンラインでどうこうという構想等、現在検討されているところはあるですか。

(田中校長) 開校して3年間、文科省の遠隔授業を行うプロジェクトをやっていたが、それで幾つかの授業を展開したということは聞いている。そのシステムは今もあるが、その後は、あまり使用していない状況であります。

(座長) 県の方から説明を兼ねてお願いいたします。

(駒瀬) 佐久平総合技術高校ですけれども、浅間キャンパスと臼田キャンパスの2キャンパスであります。佐久平総合技術高校は、北佐久農業と臼田高校、岩村田の工業科の3つで考えたわけですが、詳しいことは資料を持ち合わせておりませんのでお答えできませんが、どのような学校にしていくか、もっていくかという地域との話し合いの中で、2キャンパスで総合技術高校として残すということになったと思います。

(座長) もともとの設計の段階での構想かなと思われます。

(出水) PTAの出水と申します。今のご質問の追加になってしまいますが、今後、安曇野市で同じく総合技術高校を考えていく際に、今のロケーションが2つにわかれるかどうかというのはすごく重要な問題だと感じました。その中で今、経過を把握されてらっしゃらないというお話しだったのですが、簡単には地域同士の要望（ここにあってほしい）がぶつかり合う中で、折り合いがつかず分かれてしまったならば、今回安曇野市にあってはそのようなことがあってはならないと感じました。実際、ロケーションが分かれてしまったということによって課題が残ったと校長先生方が思われるのかどうか1点。それとともに、お話しを伺っていると、校

長先生の感じで、須坂はうまくいっている、佐久平は課題が結構あると捉えてしまったが、ロケーションの問題だけなのか経過年数なのか、他にも要素があるのかお分かりになれば教えてほしい。

(西澤校長) ご質問ありがとうございます。須坂創成で良くなった事例を中心にお話ししていますので、安曇野大北地域についても当然のことながら地元の企業が、今は後継者が少なく離れていく現状がある訳ですので、本当に地域の課題として大きなエリアの中で、地元の子どもたちをどう育てるかという問題ですので、私は協力企業会が立ち上がったことがこれは北信全域の近づくくらい、長野・須坂・中野・飯山まで含めた 54 社ですので、こういったことができるというのが大事な要素だと思っています。ですので、ロケーションの問題ということですから、この地域をどうしたいかという包括的な視点に立って言わないとできないことだと思うので、私は須坂でうまくいったといわれている協力企業会の動き、そして行政の、首長のところでも当然のことながら理解と協力が得られ、コーディネーターをやっているので大変ありがたい。ここが肝だと思っている。やっぱり風光明媚ないい場所、私もお世話になった地域ですし、内川先生も知っているし、保坂先生も知っているし、本当にこの中でお世話になりました。安曇野や白馬も含めた大きな大地の中でアルプスの麓で、是非、この地域にひとつものがあるとすれば素晴らしいことだと思っている。それでもう一つ、年数によってこれからどうなるかということですが、私は総合技術高校、佐久平も飯田 O I D E も同じ課題を持っている。うちは3学科ありますが、これからどんどん地域の課題を捉えていくと、その先も見なければいけなくなる。須坂市の第6次須坂市総合計画、2021 から 2030 までの未来チャレンジ 2030 っていうのを持っています。私良くこれ見えています。つまり数値目標でいろんな分野をいくつかあげたらいいか、ということがある。そこには当然、今学校の課題を見ているだけではなくて、地域の課題で今どこをのぼりたいのか、福祉医療、それから商業だとかいろんな産業分野、それがすべて総合計画にある。だから、こういったものを突き合わせて地域のためにやれるものがあるんじゃないかと思っている。2030 年を見てその先を見据えて、できることを考えていけばいいと思っている。

(田中校長) ご質問ありがとうございます。先ほどご説明したことも含めて、本校の課題だと思っていることについては、総合技術高校としてうまくいかないかなというよりは、キャンパスが2つに分かれていて統一的に経営することがなかなか難しいと申し上げたつもり。もともと総合技術高校と総合学科高校では教育課程が全然違う。それを一緒のところにしても上手くいかなかったじゃないかと思うが、どうしても2つに分かれていてそれを一緒にやろうとすると、2つでそれぞれ職員会議をやって決めて食い違うことはどうしてもある。それを何とかすりあわせようとするんだけど、なかなか上手くいかないという状況はいくつかあります。特に先ほども申し上げたクラブ活動などのところはどうしても2つに分かれていて一緒にやろうとすると先生たちの苦勞が大きい。そこが(2キャンパスの)デメリットかなと思う。教育課

程的には総合技術高校としては上手くいっていると私は思っている。

(竹内) 今の佐久平総合技術高校の追加の質問だが、端的に言うと佐久平総合の場合はキャンパスが2つに別れちゃうということ1つの学校1つの組織にはなっているんだけども実態としては、学校がそれぞれの学校がそれぞれに活動しているようなそんな印象を受けたが、生徒達の帰属意識とか一体感とかそのあたりはどうか。

(田中校長) ありがとうございます。非常に今苦勞して、昨年一年間でほとんど行事を一緒にできなかった。特に入学式や卒業式はずっと一緒にやっていた。一昨年の卒業式からはコロナのせいで分かれてやっている。クラスマッチや強歩大会で一緒にやることで何とか一体感をつくってきたところが今、どうしても分断されて非常に苦しい状況にある。生徒会の交流もあるし一番はクラブ部活動を一緒にやってきているので、それが一体感を生み出してきたものだと思うが、非常に苦しい状況です。

(荒井教育長) 私個人の意見、ご提案があるのですが、長野県第二次の再編整備の中で、総合技術高校を目指すという大きな枠組みがあると思うが、校舎など様々な課題があるが、総合技術高校を目指すことについてこの地域で何の課題があるか論点を絞って話し合っただけではいかんか。私個人としては、育ってきた時代と異なり一つの大きな安曇野、安曇野のエリアとして総合技術高校を目指すということを大前提として進んでいくべきだろうと考えている。

(出水) P T Aとして出席しているので親の立場として話をさせていただきたい。三校で総合技術高校、面白みがある、これからの時代必要だと思えたが、一方で、この価値を中学生、親がしっかりと感じ取れないとそういう進路を選ぶ、現実的には起こっても遅いのかなと既存の進路の良い高校良い大学という価値観にとらわれては、この高校の持つ価値が分からない。その意味では、高校再編ではあるが、中学校のうちに社会に立つ価値を判断できる教育、子どもたちがこういう高校にいきたいと評価できる教育が無いと選ばれないのではないかと不安を抱いた。その中でも親が子供の選択を邪魔しないようにP T Aとしてもある種の教育が必要。もともと子どもたちは探究心があふれる存在、というのはその通り。もともと持っているものを親は邪魔しないことをP T Aとして通していきたい。

(木下) 中学校の立場から、卒業生生徒がどのような学びをしていくかとても大事だが、今日説明していただいた三校とても魅力的だと思った。有望性・多様性・将来性があると感じた。日本の経済界、産業界の歩む道の一步先を表していると思った。農・工・商が融合していかなければならない。もうすでにやっていることに驚いた。今度できる場所もそうあって欲しい。融合だけではなく、そこをプロデュースする学びが必要。その学びを強めて欲しい。そのためには、多様な生徒も含め、その学びの豊かさが大切。将来性があるその学びが、自分たちが

生きていく社会に直結していくと中学校は、進路学習からその先の社会について教えていかなければならないと思った。学校を創るにあたり工夫は必要。融合しやすい。どんな立地で、どのような教育課程が打ち込まれるかと考えたら答えは単純なところにある。たまたま安曇野の中には農・工・商と良い今がある。将来も良い形で融合してもらいたい。

(内川) 少子化が進んでいるという問題と変化が激しく多様化していく不確定な時代ということ踏まえて、高校再編が迫られているということは共通理解されている。「高校再編」というピンチをチャンスに変えていく発想でやっていこうという視点が大切。須坂の話でいうと、工業科を新しく作ったという発想はとてもいい。ピンチをチャンスに変えるという視点から、総合技術高校というのも選択肢の一つになりうる。大事なことは、いろんな立場はあるが、狭い範囲での利益代表・利益誘導ということではなく、地域全体や子供・保護者のニーズに本当に応えられるものはなにかということを考えていくことが大事だ。さらにそれは20年、30年先を見通した時、ここでの議論で責任を持てる方向性を出せるのか我々は迫られている。理想論かもしれないが、従来の枠にとらわれず、高校再編によって、地域の産業を作り出すような人材であり高校が生み出されるようになればいい。

(横川) 2人の先生から出た課題の中で「地域性」が重要。地域の課題、企業の課題は統合したときに大きな課題となる。大町の統合でもそうだった。11区と12区の通学区を超えた話し合いは大きな意義があり、課題解決につながる。定員割れがこれだけ多い中で、子どもたちのために何ができるのか。地域で企業の課題を考えて、総合技術高校をつくっていくかを「子ども中心」に考えて欲しい。

(保坂) 農業高校は作物を作ればいいという時代ではない。それをいかに販売していくか、作る段階でもコンピューターで制御されていく、そんなことが当たり前という時代。子どもたちが将来どのような道に進んでいくにしても、様々な分野が融合した社会に出ていくことを考えれば、「総合的な」というのは大前提である。いかに小さいうちから視野を広げてあげるかということが、教育を作っていくうえでまず考えていくべきこと。普通科の校長であるが、普通科も変わっていかなければいけないという前提のうえで、ぜひ、総合技術高校をつくってほしい。

(内川氏代理) 将来、経営者になるには、まずは数字を知らなければならないということと、農業に限らず、すべてそうなのだが、原価計算とかそんな細かい簿記に関する勉強はしなければならない。3年間、簿記の勉強は難しい。学生のみなさんは、たいへんだと思うが、総合技術高校になるとそのようなメリットがあるかな、と感じた。

(坂中) 今日、3校の説明を聞いて、総合技術高校の魅力を十分理解ができた。農業のことで

は、作物を作るのは、技術的には勉強して、経験を積んでいけばできるが、作物をつくるだけでは、世の中は回っていかない。マーケティング能力というものを、作物をつくる立場でありながら、理解していないと、作ったけれども、売れない。こういったことに陥って、地元の農家さんでも、困っていらっしゃる方が多い。今後、子どもたちには、こんな能力をつけていただけるように、お願いしたい。また、実際にこの地域で、総合技術高校を作っていくとしたら、通学する距離が遠くなる子どもたちがほとんどだと思うので、学校の位置は、通学のしやすい環境を最優先に、お考えをいただきたい。

(関) 本日から参加。総合技術高校は、地域産業を担う人材を育成しており、県内、地域の就職率も高く、地域にとって重要な存在と認識している。興味がわく取組をしていると感じた。旧 12 通学区には3校あるが、定員に達していない学校もある。これからますます生徒数が減っていくなか、単に学校を絞っていくことで、進路の選択肢が狭まることであってはいけない。学校の存続については、地域や関わってきたみなさんの思いが込められているので、地域、同窓会の意見を加えながら検討することも必要だと考える。いずれにせよ、合意の形成が大切。議論を十分して、進めていくことが大切だと思う。

(須沢) 地元で高校があってもほしいという思いは皆同じ。しかし、その枠を超えて、その先を考えていかなければならないのが今の時代。11 通学区内にはたくさんの私立高校があるが、その私立高校と渡り合えるような総合技術高校をつくっていかないと、10 年後にはまた再編の話が出てくる。総合技術高校は必ずや必要なこと。その方向で進むものと考えている。

(樋口) 総合技術高校の教育の効果がよく分かった。子供たちが入学してからも色々な選択ができるというのは非常に良いことだと感じている。私立高校との関係があるので子どもたちに選ばれるような高校づくりをしてほしい。

(橋渡) 総合技術高校の現状と課題の説明を校長先生から直接聞いて、よさや課題がよく理解できた。私たちはここで話を聞いて理解できたが、地域の一般の人々が同じレベルで理解できているかというと、まだまだその差は大きい。住民説明会を見ても総合技術高校の捉え方が人によって差が大きい。それを考えると我々がこの場で方向性を決めるのは大事だが、一般の人々にそのことをしっかり理解してもらうことを同時にやらないと、方向性は出たけれど地域では理解されない、ということになり、地域が一つになれないことも考えられる。まだまだ機は熟していないと考える。

(竹内) 総合技術高校の子どもの様子、地域とのつながりを聞き、多くのメリットがあると感じた。もちろん課題もあるということで統合していくことの難しさも感じた。高校だけの問題でなく、小学校からのキャリア教育としっかりつなぐことで地域の初等教育が充実するきつ



けになる。総合技術高校であるからこそ地域とのつながり（産業面や地域の生活）が大事だと認識した。総合技術高校の魅力は大きいということで方向性については異論がないが、その学校をどこにつくるのかという議論を大いにしていきたい。高校が地域とつながることが重要であるということは、地域にとっても高校の存在が重要であるということであり、大北地域が元気になるための高校づくりのための議論が進むことを期待している。

（平林）今日3校の学校概要をお聞きして、かなり総合技術高校に魅力を感じた。この地域で総合技術高校を、3校の良さを取り入れた形の高校ができればと感じた。

（千國）前回欠席、この先も出席難しいので少し話をさせていただく。前回の資料を見させていただいた。今日の委員の皆さん方のご発言もありましたが、やはり年度の高等学校の志願状況等々のこと、前回の豊科高校の校長先生の議事録を読ませていただいて、大変なことになっているんだなという認識、その思いは共通に持っている。そういうことの中で、普通高校のことについても言及をされていたが、私も普通高校についても、これは松本広域として考えていくべきだと思う。その場合にはこの地域の特性である私立高校、これとの関係性と必ず整理をしないと前に進んでいかないと思っている。同じく大変状況が厳しいという前提の上での、専門高校ですが、当初の会議録を見せていただくと、単独で存続するかそれとも総合技術高校なのか、その他の道を探るのかを議論すると、皆さんから忌憚のないご意見を頂戴したいということでお伺いをしていましたが、既に総合技術高校ありきということに進んでいるのではないかと、その他のことをあまり申し上げても意味がないのかなと思っております。例えば大規模にして、県内一つの区切りにして専門校、単科の専門校ではいけないのか。あるいは3年制ではなく5年制ではいけないのか、というような議論は全くなかったのかあったのか知りませんが、本日のところはそういう大きな流れが出来ていると、県の方でもそういう流れだということですので、色々申し上げても仕方がないかなと思っている。そういう面で、先ほど総合技術高の校長先生からそれぞれお話を伺って、それぞれ素晴らしいということは前提にしつつも、私ども安曇野市内で4校の関係者からヒアリングをしておりますし、2校の専門高校からのヒアリングもしております。その中で見てまいりますと、ほぼ同じことをやられている、同じ問題意識を持って同じことをやられていると私には見えた。それでは何故、総合でなければならないのかということへ、現段階で私の思いは、そこまでは行っていないということがあります。いずれにしても、冒頭申し上げたとおり、子どもさんが減ってくるという状況の中で、どうかしていかなければならない、これは当然のことだと思っておりますが、まだ総合技術高校でいいのかどうかということについては、整理ができていないと、申し訳ございませんけれどもそのような状況です。以上です。

（高橋）避けることのできない少子化の問題から全てが始まっているところで、これを抜いてものを考えることはできないと、私は考えていましたので、これ再編ということは必ず行われ

ていくのではないかと思う。その中で、私、商工会で総合技術高校がいいかどうかわかりませんが、今日お話を聞いた中での、須坂創成高等学校の先生のお話を聞きまして、この中で現実に起きている問題として、先ほどされておりました就職をしてくれている人も多くなっているというお話も聞きました。そういう話ができますと私たち商工会の会員としても企業自体も学校を支援しなければいけないと、お互いにメリットが出て、win-win というそういう発見が出てくる。大変うれしい話を聞かせていただいた。私は流れとかわかりませんが、こういうことが出来ていくということ自体が、地域の発展に必ずつながっていくという気持ちで、今日は聞かせていただいた。ありがとうございます。

(矢崎) いろいろな会議に出まして、今日は2校からお聞きしましたが、基本的な考え方を聞いておきますと、子どもの融合性、ですからこれは、本来、小学校の高学年から中学生の、小学生の高学年から中学生の段階でこれをやるということであると思うんですね。あまりにも高校の年齢卒業 18 歳という歳を考えると遅い。このへんがちょっと間違えていると思う。教育のいき方、少子化の問題というのは、本来は、教育委員会の問題じゃないと思うんです。行政の問題ですね。で、教育委員会はどういう子どもたちを育てていくのか、その仮定をするのが小中高、ここにあると思うんですよね。私は、その辺をもう一遍整理してからでないと、教育レベルがどんどん落ちていく。高校の卒業 18 歳という年齢になったときに、また改めて、3 年考えて、農業、工業、商業、融合を図っていくということが、企業の立場からしたら、あまりにも時間がものすごい。企業はすでに、一般の食品の会社でさえ、飲食店でさえ、自分のところで野菜を作ろうと、ということになってますね。なお、一般企業は、こういう関係にしる、大企業にしる、屋上の空いたところでどんどん野菜を作っている。もうそういう時代でございますから、ちょっと今改めて、技術高校3校を取り上げるのではなくて、こういう考え方で融合性を持つのは、小学校高学年から中学校にかけて、なにも技術高校3校、例えばこの地域でいえば、専門高校といえ、穂高と南農、それから 11、12 区を見れば、南農、穂高商業、池田の池田工業になるんですけど、普通高校を全部含めて考えなければいけない。この考え方は、そのへんがちょっと間違っていると思うんですよね。改めて、高校へ、でかい金かけて、新しい高校作って、そこで得るものはなんなのか、ちょっと今話をお聞きしていますと、そんな感じがしました。で、専門学校って何なんだろうかと、これはあくまでも、その技術をどう高めるかということなんですね。マーケットその他申し上げましたけれども、それは例えば3校を見ますと、穂高でも南農でも池田でもやってることですね。で、私も先ほどの話を聞いておきますと、安曇野においては問題ないだろうと。総合技術高校を私は作る必要はないと思います。なぜならば、全県で見ましても、この地域の3校というのは、うまくできてますね。工業の専門高校あり、農業の専門高校あり、そして商業の専門高校があるわけです。こんな明確なことないですよ。ですので、ここはこことして、その学校がより幅広い教育をどうしていくかとらえることが必要であって、改めて、でかい金かけて、そしてその総合技術学校をつくるということがはたしてこのエリアに合うのか。あくまでも少子化問題は、行政の問題として切り離

さなければいけない。子どもたちをどうレベルをあげていくかと、たまたま専門高校が3校ありますから、それに伴ってしっかりとした教育をどうしていくのか、専門性を高めていくのか、そしてその高めた専門性がどう地域に貢献していくのかという明確な課題をもって、考えてかないと、すでに、技術の先進の話もお聞きしましたが、果たしてその必要があるのか。ここへ焦点を当ててほしい、そして、総合技術高校の考え方をせめて小学校高学年、くどくなりますが中学校の中で育てていただいて、自分が高校へ行くころにはその土台を持って、高校の進路に入っていただく。そういう形ではないでしょうか。そしてこれは職業高校だけの問題ではなくて、日本の教育、そういう広い観点で見ないとダメなんです。ですので、長野県の教育委員会として、もう一度考えなければいけないのではないかと。例えばこの高校（池工）を考える会においても7年も8年も時間がたっている。その時間をロスしている間にどんどん変わってってしまう。ですから、私はこの地域においては、優先する必要はないと思う。より今の学校において、しっかりとした教育、これを考えると、そしてその地域の高校を考えると、教育のあり方も考える。学校としての独自性を考える。以上です。

（降幡） だいたい最後なので意見は出尽くした感じです。私今日聞いていて、前に高校のPTAをやっていたもんですから、その立場で3校のお話を聞いていました。1つ思ったのが、どれも素晴らしいのですが、佐久の高校は何となく聞いていて3校が1校になったんだけど、1校は分校じゃないかというような印象を受けました。失礼な話かもしれませんがそんな印象を受けました。これからどんな地域で、どうやってまとめていくか、総合技術高校をつくっていく方向があるようですが、そのときにそのようなことがないようにできればまとめて、やはり子どものためにということを最優先していただきたいと思いました。

（座長まとめ） お時間が押していますが、ご容赦ください。本日、お一方ずつご意見をいただきましたが、よろしいでしょうか。本日、県内の3つの総合技術高校の現状と課題について皆様と共有させていただきました。皆様方の意見を整理しますと、総合技術高校の魅力に関しては、①専門性、②横断性、③融合性、④柔軟性、⑤協働性などの観点からご指摘いただきました。1つ目は、専門性です。それぞれの学問体系に裏付けられた専門性をカリキュラムに明確に位置付けているという点です。2つ目は、横断性です。各学科の専門性を前提としながらも専門的な学科のみならず他の学科の学習内容に関しても横断的に学ぶことができるという点が指摘されました。3つ目は、融合性です。激動する社会に対応すべく、ある専門とある専門との接続を意識して融合した学びを推進していくことができるという点です。4つ目は、柔軟性です。生徒の興味・関心等に応じて柔軟に科目等の履修が一部可能であり、キャリア設計に柔軟性を与えるという点です。5つ目は、協働性です。地元の産業界、地域住民、そして。保護者の皆さんも含めて、コンソーシアムともいべき協議体を作り、お互いにとってメリットとなるような協働的な関係性を構築しているという点です。須坂創成高校から説明にもありましたように、こうした5つの観点が複合的に合わさることで多様な生徒の進路選択にフレキシブ

ルさを与えているというご指摘がありました。

他方で、総合技術高校に関して、現時点ではまだ機が熟していない、または時期尚早であるというご意見や、現在の工業高校等の学びとほとんど変わらないのではないかというご意見がございました。これに対しては、であるとするならば、ここ数年来、教育現場が苦慮している定員割れの状況に対して、どのような対策を講じることができるか、具体的な対案を示し検討を深めていく必要があるかと思っております。

このほか、今後の論点としましては、3点ほど挙げていただいたと思います。1つ目は、再編を行った場合の通学区の問題、具体的には、生徒の通学時における安全性の確保や交通手段の確保に対してどのような対応ができるのか、セーフティネットの問題です。2つ目は、中学校段階でのキャリア教育の充実や保護者に対して積極的な情報発信・提供を行っていく必要があるというものです。3つ目は、地域住民、県民の方に対して、総合技術高校に対する理解度を深める取り組みが必要ではないかというご意見です。

最後に、委員の皆さんが共通してご指摘いただいたのは、子どもたちの声、子どもたちを主体として、高校改革を行っていくべきであるという点です。10年後20年後の社会のあり方を踏まえて、責任ある意思決定をしなければならないという問題意識から、現在、中学生に対するアンケート、中学生に対する対面ヒアリング、高校生に対するフォーラムなど未来の社会を担う当事者たる中学生、高校生との対話を行っております。また結果等に関しては共有をさせていただけたらと思います。

これで、本日の合同部会を閉じさせていただきます。今後、旧11通学区の懇話会、そして、12通学区の協議会に対する「報告」を行うこととなりますが、その内容に関して改めて皆さんにご確認いただく必要があると思っております。従いまして、次回の合同部会を最後にさせていただきます、報告の内容についての協議する機会を設けたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

2回分のご発言の内容等を踏まえた報告の内容の案を私座長と事務局の方で整理・作成し、後日、改めて事前に目を通していただこうと思っておりますので、ご確認ください。

今回は、5月14日（金）、場所は同じ会場になります。重ねての説明になりますが、これまでの2回の内容を踏まえて、協議会および懇話会に報告する内容の確認をいただきます。次回の会議に先立って、ご意見ご要望はありますでしょうか。では、これにて閉会いたします。大町市さん事務局の皆さんにおかれましては感染症対策をこうじていただきありがとうございました。また、遠方から高校の校長先生にお越しいただき、貴重なお時間をありがとうございました。座長としましては閉じまして、事務局のほうへお返ししたいと思います。本日はありがとうございました。

（事務局）荒井先生には円滑に議事を進行していただきありがとうございました。構成員の皆さまにおかれましては、全体としてご発言ご要望等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、以上を持ちまして安曇野大北地域の高等学校を考える合同部会第2回の会議を

終了させていただきます。本日はお忙しいところお集まりいただきありがとうございました。